

いつ頃からだろう。公園やスーパーなどで親子連れを見ると、その様子を目で追うようになっていた。親子の楽しそうな会話を聞く、心が安らいだ。そこに幸せを見ていたかった。そして、「虹の家」の子どもたちのことを思った。

虹の家は、里親として複数の子どもを受け入れるファミリーホームで、夫婦で運営してきた。以前、ここにいた母子家庭育ちの10歳の男の子が、母親との暮らしについて話してくれたことがある。母親が足を骨折し、片足を浴槽の外に出して風呂に入っていたら、そのまま出られなくなったそうだ。そして、自分がかくに頑張つて母親を助けたかを、得意げに話してくれた。私が「よく頑張ったね」と言うと、少し照れながら、「うん。俺もママも、いっただって頑張っていたよ」と返してきた。そしてしばらくして、「でも毎日、たまたかされたのは嫌だったなあ」

とつぶやきながら笑った。目を細めて私を見つめるその笑顔が、なんとも切なくて、私はふざけたふりをしてその子を抱えると、「そうか、すごく頑張っていたんだなあ」と強く抱きしめ

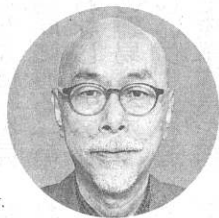
光市内のNPOを通して実施している。昨年は初めて、父親たちへも実施した。このプログラムはマイツリー・ペアレンツ・プログラムといい、虐待防止に特化している。米国と日本で虐待防

すれば絶対に変わるというものもないだろう。それでも、プログラムを11年間実践してきた中で私は、親が変わるのを見てきた。そして、虐待する親への思いも変わった。

てみると、さまざまな過去や事情を抱え、傷付き、痛み、疲れている人たちが多かった。そんな人たちがプログラムを通して変わり、親として回復していく姿を見ると、ただ責めたり、罰したりするだけでは本当の解決にはならず、そのような親にこそ支援が必要なのだと、あらためて思った。

虐待する親の回復を願って

はたけやま
のりお
畠山 憲夫



た。児童虐待のニュースを聞くたびに心が痛む。子どもの命が奪われたときには、誰の責任かと追及したくなり、加害者に対しては怒りを覚えた。だから、虐待を受けた子どもの親には関わりたくなかった。

止専門職の養成をしてきた、森田ゆり氏が開発し、関西を中心に関東でも数カ所で実施されている。虐待死などの事件は、子どもが保護された後、親元に帰ったときに起きることがある。親が変わらなければ、虐待が起きるリスクも

プログラムを受けた人たちの中に、鬼のような親は一人もいなかった。以前はそういう親がいるものだと思っていたが、実際に会っ

子どもたちのためにも、虐待に至ってしまう親たちが回復できるような支援が必要だと思う。

しかし、時が過ぎて今、私は虐待をしてしまう母親への回復プログラムを、日

とちぎ家庭養育推進協議会代表理事。フリーの映像ディレクターとして28年間、テレビ番組を制作。2005年に日光市での児童虐待防止のNPO法人立ち上げに参加し、里親となる。10年にファミリーホーム「虹の家」を設立。21年より現職。県里親連合会会長。東京都出身。同市在住。68歳。

とちぎ家庭養育推進協議会代表理事。フリーの映像ディレクターとして28年間、テレビ番組を制作。2005年に日光市での児童虐待防止のNPO法人立ち上げに参加し、里親となる。10年にファミリーホーム「虹の家」を設立。21年より現職。県里親連合会会長。東京都出身。同市在住。68歳。